

## 平成二十七年年度研究会活動報告

### ノルゴル佛典研究会

研究会代表 阿部 真也

研究会は、モンゴルの仏教について様々な角度から研究を目的としています。現在は、十五年前から続いた『モンゴル仏教史』モンゴル語原本のローマ字転写および訳注をおこなっています。この写本は、かつて元寶師によって訳された『蒙古喇嘛教史』（原文チベット語）のモンゴル語写本であり、その研究はまだ学問として、さしたる成果は出ていません。これまでの研究成果は、「大正大学総合佛教研究所年報」の第十八号（昭和八年三月）、第十九号（平成九年三月）、第二十号（昭和三十年三月）、第二十一号（平成十一年三月）、第二十二号（平成十二年三月）、第二十三号（平成十三年三月）、第二十四号（平成十四年三月）、第二十五号（平成十五年三月）、第二十六号（平成十六年三月）、第二十七号（平成十七年三月）、第二十八号（平成十八年三月）、第二十九号（平成十九年三月）、第三十号（平成二十年三月）、第三十一号（平成二十一年三月）、第三十二号（平成二十二年三月）、第三十三号（平成二十三年三月）、第三十四号（平成二十四年三月）、第三十五号（平成二十五年三月）、第三十六号（平成二十六年三月）に掲載されています。

十六年三月）、三十七号（平成二十七年三月）に掲載されています。また、大正大学総合佛教研究所の助成金によって、『モンゴル佛典研究（一）』（二〇〇二年六月、ノンブル社）、『モンゴル佛典研究（二）』（二〇〇六年五月、ノンブル社）、『モンゴル佛典研究（三）』（二〇一一年三月、ノンブル社）、『モンゴル佛典研究（四）』（二〇一五年三月、ノンブル社）の四冊を出版しました。では、本研究会の研究内容の一部について紹介します。

使用するテキストはモンゴル語の写本ですが、チベット語版は、ドイツ、日本、中国で三種出版されています。チベット語版からの翻訳としては、ドイツ語訳、日本語訳、モンゴル語訳、漢訳があります。それらを随時参照しつつ読んでいます。

モンゴル語版における問題点としては以下のものがあります。まず、外来語を表記するために作られたモンゴル語アリガリ文字やテクニカルタームを巡るものです。テクニカルタームのモンゴル語表記（あるいは訳）については、モンゴル語・チベット語アリガリ表記、サンスクリット還元アリガリ表記など様々な表記が見られます。その中にはある一定の傾向（あるいは法則）があり、それがこの文献の性格等を推測する手になるものと思われま

た、人名等の音写語に異なる表記が非常に多くある、という問題もあります。次に、異なる写本の存在の可能性です。チベット語版、あるいは翻訳との比較により、一致しない記述が時折出て来ます。確認を必要とする所です。

本文献は政治史と仏教史の二部構成となっています。仏教文献としての特徴あるいは問題点については、これから明らかにしていく所ですが、何点か挙げておきたいと思います。まず、チベットの仏教学者（サキヤパンディタ）の格言、インドの龍樹の言葉、仏陀の言葉、ほか経典からの引用がしばしばある事です。サキヤパンディタの格言以外は出典が不明なものも多く、今後精査を行っていく必要があります。次に、仏教語の音写が、チベット語からとサンスクリット語からのものの二通りある点です。教理内容と合わせて検討の必要があります。

なお、本年度の主な研究会の活動については次の通りです。

- ・ 毎週火曜日…18時～20時位、研究会
  - ・ 日本モンゴル学会に参加（春季、H 27・5・18 新潟大学。秋季、H 27・11・21国立民族学博物館。）
- 今後の予定

毎週火曜日…17時～18時、初等モンゴル語（希望者がいた場合）

18時～20時位、研究会

場所…大正大学史学閲覧室

## 梵文写本不空羼索神變真言經研究会

研究会代表 倉西 憲一

当研究会は、大正大学と中国民族図書館との学術交流のもとに出版された『不空羼索神變真言經梵文写本影印版』に基づく転写テキストの作成を目的としている。

『不空羼索神變真言經』は、インド中期密教を代表する『大日經』『金剛頂經』に先行する經典、いわゆる初期密教經典であり、インドにおいて密教が本格的に形成されていく過程を知る上で重要な位置にある。インド初期密教文献の多くは、チベット語訳や漢訳に現存しており、一次資料である梵文写本が現存する例は極めて稀である。それゆえ本經の梵文写本は、極めて資料的価値が高いと言え、本經の文献学的研究は、これまであまりなされてこなかったインド初期密教研究の礎となり得る研究である。また真言宗において日常的に誦誦される「光明真言」は、『不空羼索神變真言經』を本軌としていることが明らかになり、インド密教のみならず日本における真言密教を研究する上でも重要な經典であるといえる。さらにマンダラを中心とする図像学の範疇においても、本經所説のマンダラが注目されており、本經はインドにおけるマンダラの展開過程を研究する際に必要不可欠な文献である。

当研究会では、『不空羼索神變真言經梵文写本影印版』

を基礎資料とし、対応するチベット語訳および漢訳を適宜参照しながら精読している。ただし、チベット語訳は比較的梵本によく対応しているが、漢訳は大きく異なる場合も少なくない。また当写本には、文法および統語論上で解決すべき問題が多く存在し、その読解には多くの困難が伴う。そこで当研究会では、類似の内容を説く関連文献にも視野を広げ、本經所説の教理や儀礼の理解に努めている。

なお、当研究会は平成八年度より発足しており、これまでの研究によって、梵文写本全百六十二葉分のうち、約百葉ほどのローマ字転写テキスト化を完成している。これら一連の研究成果は、「Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapaśākalparāṇa (I)~(IV)」として『大正大学綜合佛教研究所年報』において報告しているが、昨年度より、従来の方針を若干変更し、ローマ字転写テキストの提示だけではなく、サンスクリット語校訂テキストの Preliminary Edition、および試訳を加える形式で研究成果を報告している（詳細は密教聖典研究会「Amoghapaśākalparāṇa: Preliminary Edition および和訳註 —サンスクリット語写本 [E.97v4-99r2]—」『大正大学綜合佛教研究所年報』37、pp.(41)~(68)を参照）。本年度は、この方針を継続して「Amoghapaśākalparāṇa: Preliminary Edition および和訳註 —サンスクリット語写本 [E.99r2-100r6]—」を報告する。

今後も本經の全容解明を目指して文献学的研究を継続し、

その成果を『大正大学綜合佛教研究所年報』において報告していく所存である。このような研究を通じて、インド密教の初期段階における種々の教義や密教儀礼の実践方法を明らかにし、インド密教の形成と展開に関する研究の一助となることを目指していきたい。

## 『律経』『出家事』研究会

研究会代表 平林 二郎

本研究会は、二〇〇一年に出版された『チベット・ウム字転写梵文写本集成影印版 (Facsimile Edition of a Collection of Sanskrit Palm-leaf Manuscripts in Tibetan dBu med Script)』に含まれる『律経 (Vinayasutra)』及び『律経註 (Vinayasutra-utthi)』のサンスクリット語写本を解説すべく研究を進めている。

二〇一四年度、本研究会の研究成果に基づく米澤嘉康(代表)「七世紀の律文献にみられる仏教者と仏教教団の研究」科研基盤(C)が採択された。これにともない、本研究会は米澤科研と連携し研究会を開催している。

本年度の主な活動としては、上半期に研究の第一次資料となる梵文諸写本の問題点を整理し、下半期に『律経』『出家事』の校訂テキスト出版へ向け研究を開始した。

問題点の整理としては、まず、本研究会の研究成果とShayne Clarke氏の研究成果を基に『律経』・『律経自註』と他の律文献の位置付けについて検討した。次に、Luo Hong氏の研究成果などをもとに『律経』・『律経自註』の諸写本の系統を検討した。また、8月24日から三日間、筑紫女学園大学にて研究会を開催し、中川法正先生より *grantha* をどのように考えるかなど、貴重な情報や意見を

いただいた。その他、10月21日に岸野亮示先生(佛教大学)を招聘し、『律経』と「根本説一切有部」の関係についてや、Uttaragranthaの構成などについて検討した。

校訂テキストの出版へ向けた研究としては、米澤・平林が中心となり『律経』・『律経自註』『出家事』の写本とパット&ゴーカレの校訂本 (B.V.Bapat & V.V. Gokhale eds., *Vinayasūtra and Auto-Commentary on the same by Guṇaprabhā Chapter I - Praṛgāyāṁsu, Patna 1982.*) を読み進めている。

全66葉からなる『律経』写本については、ローマ字転写テキストのPDFファイルを、当綜合佛教研究所のウェブサイト ([http://www.tais.ac.jp/related/labo/sobutsu/sobutsu\\_book/vinayasutra.html](http://www.tais.ac.jp/related/labo/sobutsu/sobutsu_book/vinayasutra.html)) に公開している。

## 頼瑠撰『真俗雜記問答鈔』訳注研究会

研究会代表 小宮 俊海

『真俗雜記問答鈔』は、新義真言教学の祖と称される中性院俊音房頼瑠僧正（一二二六—一三〇四）が、その時々記したものを集成した著作である。その内容は一二三〇余条にのぼり、書名のごとく真言密教や仏教諸宗に関わる事項はもとより、頼瑠自身の夢記や和歌、さらには公家に対する修法や諸家との書簡、和歌論や世典に関する記事など、その内容は実に多彩である。一人の真言僧侶による教学的著作の域を超え、中世を生きた頼瑠の人物像、さらには当時の宗教文化や社会状況までも窺い知ることのできる貴重な資料といえよう。

本書は古来より三〇巻・二四巻・一一巻など種々の説があり、また写本によつて巻順の移動や内容の増減が著しい。すでに『真言宗全書』第三七巻に、高野山南院松永有見師蔵写本を底本とし、二七巻本の体裁をもつて活字化されているものの校訂テキストとして未だ不十分とされる。

そこで本研究会は諸写本を聚集し、なかで巻数の揃った最も古い写本である智積院新文庫蔵本を底本に定め、『本文』に校訂を加え、条目ごとに【校勘】【訓読】【注釈】【解説】を施している。

今回報告するのは、新文庫蔵本全二十五冊のうち、整理番号・新文庫三一—四（二五—一）に相当する一冊の後

半部分（二一丁裏—二三丁裏）である。本書は外題「真俗雜記卷二」、内題「真俗雜記鈔第二」とあることから、「卷第二」と定め、今回報告する箇所を仮に「卷第二ノ二」とした。【本文】の条目ごとに適宜に題名を付け、通番号を付した。「卷第二ノ二」に収録される条目は次の通りである。

一七、西方向不事。一八、師資契深事。一九、鼻端觀字事。二〇、叡山法地房見十禪師御身事。二一、一念十念事。二二、置東寺寺務事。二三、弥陀釈迦等在心事。二四、大師願安養都卒事。二五、八斎戒功能事。二六、無相事。二七、竜猛竜智影事。二八、醍醐寺三寶院祖師影事。二九、貞元政要云事。三〇、五智通正体・後得事。三一、即身義心住三摩地事。三二、密抄第六云事。三三、~~義~~字義因有六種五種事。三四、又同書中当知最後無依等事。三五、真言宗三諦不思議事。三六、声字実相各極性海深理事。三七、問答雖字体同而用義別事。三八、真言不思惟義理成世利事。三九、真言本座受請事。四〇、我覚本不生五句説五字事。四一、二教論自相同相事。四二、衆生依業散集不同事。四三、若常愁増愁事。四四、一念相応恵事。四五、宝鑰恕己施物事。四六、宝鑰声聞十善事。四七、同論邪見外道事。四八、一夏随意凡聖差別。

本年度は以上、三二条について各条目の担当者を振り分け、研究会において本文校訂ならびに訳注研究を進めることができた。今後も次年度以降引き続き訳注研究を進め、「卷三ノ一」を順次発表表刊行予定である。

## 近世唱導文芸研究会

研究会代表 由井 恭子

本研究会は、大正大学図書館に所蔵される近世唱導関連文献の翻刻、研究を目的としている。当面の目標は、大正大学図書館蔵本『類雑集』（全十巻）を広く学界に紹介することにある。『類雑集』の版本は、大正大学以外にも所蔵されているが、翻刻はなされていない状況にある。活字化されていない『類雑集』の翻刻作業は、非常に有意義な研究報告であるといえる。

本研究会では、平成二十三年度から『大正大学綜合佛教研究所年報』に一巻ずつ翻刻を報告してきた。今年度は、総勢十二人の会員を中心に研究会を運営し、巻六の翻刻に着手した。

また、本年度も引き続き翻刻作業の他に、引用文献の調査も実施した。『類雑集』に引用されている経典などを調査し、原典と校合した。典拠名とともに、本文に異動がある場合は、校異の結果を脚注に示した。

以上のように、今年度は本研究会の研究成果である『類雑集』巻六翻刻と出典考証を平成二十七年年度『綜合佛教研究所年報』に掲載できるところまで漕ぎ着けることができた。

『類雑集』は国文学研究者において、以前より資料的価値が認められていたにもかかわらず、活字化されていないことにより、研究が進んでいない状況にある。『類雑集』全巻翻刻を達成し、近世における唱導書のあり方について、研究展望が拓けるようにしていきたい。

## サンスクリット修辞法研究会

研究会代表 吉澤 秀知

本研究会は、サンスクリット文献に見られる修辞法の解明を目指して平成一九年度より共同研究を開始し、九年目に当たる本年度も輪読を中心とする共同研究会を開催してきた。

インドにおける修辞法研究の歴史は、現存する資料の上では、『詩の修辞法 (Kāvyaṁkāra)』の著者であるバーマハ (Bhāmaha) と『詩の鏡 (Kāvyaḍarsa)』の著者であるダンディン (Daṇḍin) という両修辞学者によって始まったとされる。そこで、本研究会では、まずダンディン著『詩の鏡』を取りあげ、ローマナイズ・テキストならびに訳註の作成に取り組み、平成一九年度より二三年度までの当研究所年報に、全訳註を五回に分けて発表した。

次に、当研究会の研究課題として、先行研究のあるバーマハの著作（当研究会に属する古宇田が『長谷川仏教文化研究所年報』に連載。未完）をひと先ず措くことにして、ダンディンの詩論を継承したヴァーマナ (Vāmana) の『詩の修辞法の手引・註 (Kāvyaṁkārasūtravṛtti)』に焦点を当てることにした。平成二四年度より全五章より成る本書の読解を開始し、第一章のテキストならびに訳註については当研究所年報（二〇一三年）に発表した。平成二

五年度には第二章と第三章の訳註を完成させ、当研究所年報（二〇一四年）に発表した。現在に残る第四章と第五章の読解を進めているところである。本訳註の完成により、ヴァーマナの修辞法に関する見解を解明できるだけでなく、インドにおける修辞学・詩論の黎明期（七～八世紀末）の展開を検証することが可能になると信じるものである。

また、近い将来、サンスクリットの修辞学で最も著名な学者であるマンマタ (Mānata) による『詩の光明 (Kāvyaṁprakāśa)』の読解を開始するとともに、修辞法が最も効果的に使用されていると考えられる「マハーカーヴィヤ (Mahākāvya：大詩)」と称される作品群における修辞法について、修辞論書の定義と比較しつつ、用例の検証を開始する予定である。

これらの修辞学に関する研究は、たんにサンスクリットの文体や語の用法に関する知識を蓄積するだけでなく、厳密な解釈ならびに翻訳法の確立にも役立つと考えられるので、インド・アールヤ語の原典を扱う幅広い分野の研究者の積極的な参加を呼びかけるものである。



### 「瑜伽論声聞地 第三瑜伽処」研究会

研究会代表 石田 一裕

本研究会は一九七九年に始まり、『瑜伽師地論』『声聞地』の梵文テキストと、その和訳を作成することを目的として研究を続けてきた。「声聞地」は第一瑜伽処から第四瑜伽処までの四つの章からなり、これまでに第一瑜伽処所処と第二瑜伽処を大正大学総合仏教研究所研究叢書『瑜伽論声聞地 第一瑜伽処』、同『瑜伽論声聞地 第二瑜伽処』として出版した。

当研究会はその活動を継続し、「声聞地」第三瑜伽処の研究を進めている。これまで梵文写本に基づいて、チベット語訳・漢訳テキストを参照しながら、梵文テキストの校訂とその和訳を作成してきた。

写本については、一九九四年に出版された『梵文声聞地原文影印本』および、その元となった原写本より直接撮影したマイクロフィルムのコピーを使用している。この写本をもとに、一九六一年出版のウェイマンの部分的な校訂と一九九〇年出版の佐久間秀範氏の部分的な校訂とを参照しつつ、一九七三年に出版されたシュクラによる梵文テキストを修正し、北京版・デルゲ版・ナルタン版・チョーネ版の四本のチベット訳および玄奘による漢訳とを比較対照しながら、より正確な「声聞地」の再校訂サンスクリットテ

キストと、その和訳の作成・出版を目指している。これまでに約六年をかけて第三章を読み、校訂・和訳の第一段階を終えた。この作業は、テキストが難渋であったため、予定よりも二年余分に歳月を要した。

本年度は、平成二五年度から始めた校訂文と和訳の見直しを継続して行ない、全体の約八割まで作業を進めた。しかしながら、これまでに解決できなかった問題点も多く残されており、出版までには時間を要することが見込まれる。その一方、テキストの見直し作業の中で、「声聞地」の理解はより深まっている。数年以内に第一瑜伽処、第二瑜伽処と同様の形式で出版する予定である。

研究会は週一回のペースで行ない、これまでに作成した校訂テキストとその和訳を、研究会参加者で文体して写本・チベット訳・漢訳と照合し、内容の確認とテキストの訂正を行なった。来年度以降も同様に、校訂テキスト・和訳の見直し作業を進め、出版を目指していきたい。

また今年度は八月二〇、二一日に韓国金剛大学において開催された研究セミナー (Śrāvakabhūmi and Buddhist manuscripts) に、研究会に所属する阿部貴子、石田一裕、長島潤道の三人が参加し、声聞地研究の成果を発表した。

## 『唐決』——日本における天台教学受容過程の研究——

研究会代表 寺本 亮晋

本研究会は、第三期目を迎え、助走期間二年と二期六年に続いて「円澄疑問 広修決答」と「円澄疑問 維鐺決答」の読解作業（訓読・現代語訳・詳細な註釈）を進めてきた。この「唐決」の両テキストは、円澄が日本より発する三十の疑問に対して、唐の天台山の広修とその弟子の禅林寺維鐺がそれぞれ決答を示しているものである。円澄の発する同じ疑問に対して、両者の異なる答えを比較・検討することによって、疑問から見える当時の日本天台の教学的水準を探り、また唐からの決答の水準も推し量ることができる。そして、初期日本天台がそれらの決答をどのように受容したかを研究し、以降の中古天台を初めとする論義や口決にどのような影響を与えたかを探索の基礎となる研究である。ただし、初期日本天台、延いては日本仏教の全体に関わる論点を含む第一級資料として認められているにも関わらず、体系的な研究が不足している。そこで、現在の作業の目的は、研究会独自のテキスト作成であり、他の「唐決」テキストの研究のたたき台とする基礎的研究と云えよう。

原則、今年度も月二回のペースで研究会を開催し、研究成果として、三十問の中、四つの問答を精査・読解した。

以下、『菩薩瓔珞本業經』に舍利弗が第六住から第七住に入ろうとした際に凡位に退く記述が見られるが、その『法華文句』における第六住（六心）の解釈について問う第十六問答「身子の六心中の退は、是れ何れの位の退なるぞ」、「摩訶止観」に仏の三徳を説明する際に引かれる、大小乗の六師の典拠とその人について請う第二十三問答「体相章に六師立てる所の不審を出す。其の人掘る所与えるや」、「涅槃經」に説かれる「円伊の三点」について、点の配置や三即一の意義を問う第二十四問答「円伊の三点は何が故に釈と經意と異なるや」、「摩訶止観」に説く乗戒四句の乗急には、戒を備えているのに戒緩と名づけるのか問う第二十五問答「乗急の人も戒無ければ備わらず。何が故に名づけて戒緩と為すや」の四である。それぞれ『法華經』や天台大師智顗の三大部から生まれた疑問に、唐の回答が的を射ていないことが垣間見え、その影響が論議や口決に引用されていることを鑑みると、「唐決」がいかに重要な典籍であったかを再確認するばかりである。また、これらの問答は現在でも結論が出ていない問題を含んでおり、当時の日本の学僧の教学的水準の高さには感嘆せざるを得ない。

また、以前より底本の誤読や返り点について疑問を抱いていたため、今年度より底本の元となった版本等を集め、史料批判が可能かどうかもし視野に入れることにした。今年度は叡山文庫へ出張し、可能な限り資料を集め、明らかに

系統の異なる「真如藏」本があることを発見した。

さらに今年度も、『大正大学綜合佛教研究所年報』第三十八号に、「唐決——「広修決答」と「維鐺決答」の比較研究（三）——」として「身子の六心中の退は、是れ何れの位の退なるぞ」・「無情も応に覺を成じて発修すべし。何が故に爾らずや」・「苦集即ち滅道とは滅・苦・集も道と名づく」と為すや」・「六即は何等の聖教に的らかに其の名を出すや」・「唯識・唯心同異の二師の立てる所其の趣は如何」の第十六より第二十問答までを中間報告させていただいた。また、各会員にはそれぞれ個人研究を促し、発表・論文をまとめるよう日頃より願っている。今年度より始まった第三期でこのテキストの読解が一旦完了する予定であるが、まだ「唐決」には五種残っていることもあり、さらに続けて研究成果を報告できるように粛々と基礎的研究を続ける次第である。

## 「大学と宗教」研究会

研究会代表 松野 智章

本研究会は、「大学と宗教」の関係の学術研究に関する理論・実証研究を行うことを目的として、平成二十六年より発足した研究会であり、今年度は発足二年目を迎えた。発足当初から、昭和初期から戦中に至るまでの総力戦体制下で宗教系大学を教育史、制度史、思想史などの視点から、それらの実態を明らかにしていくことを目的としていた。

本研究会の構成メンバーは、大学史、教育学、史学、宗教学、哲学、仏教学を本来の専門領域とする、多様な専門分野から右記の研究テーマへのアプローチを学際的な視点から行うかたちで、日々の研究を進めている。二六年度は、総合佛教研究所研究員・大正大学非常勤講師を中心に発表し、二七年度は他大学の研究者の発表を中心に研究会を行った。次の通り開催した。

四月二四日「戦時下における日本基督教団とその神学校」  
齋藤崇徳（東京大学大学院教育学研究科博士後期課程）

六月二四日「戦時下における日蓮御遺文削除問題について」  
安中尚史（立正大学仏教学部教授）

八月二八日「戦時下の上智大学と日本精神」ケイト・ワイ  
ルドマン・ナカイ（上智大学名誉教授）

十一月二〇日「敗戦前キリスト教系大学における教育組織・カリキュラムの変容に関する研究」奈須恵子（立  
教大学文学部教授）

二月一八日「戦時聖公会系諸機関の離反現象」大江満先生（立教大学立教学院史資料センター百五十年史首席  
編纂員）

また、それ以外にも月一から二回のペースで総合佛教研究所研究員・大正大学非常勤講師を中心に勉強会を開催した。その成果として、平成二十七年十二月五日、大正大学に於いて開催された佛教文化学会第二十五回学術大会では、本研究会メンバー四人が発表した。以下、佛教文化学会での各メンバーの発表論名と要旨である。

・「戦前戦中期慰霊・追悼行事と宗教系大学」 寺山賢照  
大正大学の学内団体「豊山新人会」を例に、戦前期からの戦中期にかけての慰霊・追悼行事への関与実態、および大学当局および学生の意識について、学事資料、各種報告書等を用いて検討・考察を行った。

・「近代仏教学とアジア主義」 三浦周

近代仏教学の形成については「南條文雄」が記号化され、留学によって方法論を欧米から輸入したという認識が定型化されている。ではなぜそれが欧米仏教学とならないのか、といった問題は当然考慮されない。近代仏教学の歴史化に

際して、これは何と対比されて語られるべきかという検討・考察を行った。

・「戦前の大学における日本主義―日本近代化における歴史哲学試論」 松野 智章

明治期から教育勅語を通して普及した天皇という存在が、昭和期に入り、思想を表現する概念枠と後退した事実を指摘するものである。天皇という歴史的な存在をとおして「歴史」と「世界」を理解したのが戦前の概念枠なのであり、その大学の動向を検討・考察した。

・「総力戦下の教育行政と宗教系大学」 江島 尚俊

本発表においては、教育行政と宗教行政の視点から宗教系大学を論じることを目標とし、具体的には、二〇年ほど前から議論されるようになった「総力戦研究」の成果をもとに、総力戦体制が準備されていく段階において「教育」が如何なる動員対象と目されていったのかを明らかにした。

## 室町期における諸宗兼学仏教の研究

研究会代表 大橋 雄人

本研究会では、室町期の仏教研究において従来あまり注目されていない諸宗兼学・融合思想を有した仏教者旭蓮社澄円（一二九〇—一三七二）の思想研究を行っている。

澄円は、八宗の教義に通じ、入元して廬山東林寺に登り、白蓮宗の優曇普度に慧遠流の浄土教を学んだ人物である。澄円は槇尾山で三部の密灌を受け、南都で登壇受戒し、天台の承遍（檀那院流）・観豪から天台教を学び、浄土教は九品寺流、鎮西流の相伝を受け、禅宗では虎関師錬との交流が確認でき、諸宗の教義を遍学していたことが知られる。また、南朝の後村上天皇の帰依を蒙り、南朝の為に奔走している。それ故、中国元代仏教の日本への影響や皇室と仏教者との関係等、南北朝期の仏教に関する新しい研究が進むことが期待されるテーマでもある。

具体的には、これまで一度も活字化されていない貴重書である澄円『浄土十勝論』『同輔助義』の書誌的整理をはじめ、著者澄円伝の研究、『浄土十勝論』『同輔助義』の翻刻・書き下し文・語注の作成を行っている。澄円『浄土十勝論』『同輔助義』に関する先行研究は非常に少なく、思想史研究、書誌学研究、伝記研究のどの分野においても、これまでほとんど行われてきていない。そのため、本研究

会参加者各位がそれぞれの問題意識のもと個別に研究を進めている。

翻刻・書き下し文・語注作成作業の進捗状況については、昨年度までに首巻および第一巻（巻上乾上）の途中までを終え、本年度は昨年度の続きから第一巻の末までの作業を終えた。詳細については本誌掲載の中間報告をご覧いただきたい。

また、本年度はこれまでの共同研究の成果をもとに、大橋雄人研究員が平成二十七年（令和九年）度佛教文化学会学術大会において「澄円『浄土十勝論』の講義について」と題して研究発表を行った。

次年度の共同研究は、第二巻（巻上乾中）の作業を引き続き進め、個人研究についても精力的に口頭発表や研究論文の発表を行っていきたいと考えている。

### 〈参加メンバー〉

代表者	大橋雄人		
参加者	吉水岳彦	郡嶋昭示	舍奈田智宏
	工藤量導	石川達也	杉山裕俊
	長尾隆寛	安孫子稔章	勝崎裕之
	後藤史孝	岩津英資	前島信也

## 唐中期仏教思想研究会

研究会代表 小林 順彦

本研究会は、中国唐代の長安における仏家諸師の動靜について調査研究している。唐代は中国仏教の歴史のなかで、とりわけ華開いた時代であり、各宗の教義もこの時代に發展確立したと言っても過言ではない。ただ、教学面からみればその通りなのであるが、実際にその礎を築いた人物の事蹟となると、未だ明らかになっていないものが多い。華開くということは、それだけ活発に人物が動いていたと想定されるのであるが、未だ不明のものが多いのはなぜだろうか。

天台に限って言えば、所謂天台山系の流れと玉泉寺系の二流があったと言われて久しいが、特に玉泉寺系と長安の結びつきは強い。それは荊州と長安の距離の近いことに帰因していると思われる。宗団というよりは、個で動く天台僧が長安で活躍する諸師と接触し、天台の教学実践にその影響を取り入れ、独自に変化させていった形跡が見られる。問題はその天台僧に影響を及ぼした人物が一体誰なのか、またいつどこでその人物と出会ったのかということである。

さまざまな人物が往来する帝都長安は、自宗の研鑽宣揚を目的とした場合、これ以上適した場所は考えられない。そうになると、なおさらその動向が気になるところである。

これを解明するには、一般の仏教典籍からでは限界があり、その意味において広く歴史書や金石文などを俯瞰する必要があるであろう。

通常、先学の研究成果を孫引きし、また先学の調査した原典に当たって事が進められるのが普通であるが、しかし見落としが無いとは言いが切れない。ただし、そこに見落としがあるかどうかを見つけるには、それらの文献の地道な再検討しかないのである。これには膨大な時間と根気が必要である。

この研究会では、時代を唐代中期に限定し、主に天台僧を中心とするも、その他の諸師にも注意し、気になる記述をカード化し、以って普段看過されがちな些細なものに焦点を当てて調査することになっている。今年度でほぼ『全唐文』の調査が完了したので、来年度は採取したカードを整理し、その内容について検討する予定である。そして諸師の動きを白地図に落とし込んで、長安での動きを表面化させたいと考えている。

研究会発足当初は、天台僧に重点を置く予定であったが、既述の如き悩みは意外と現在の諸宗も抱えていることから、幅広く研究に寄与できるような資料集として仕上げたいと思っている。欲を言えば、地方誌や金石関係にも手を出したいところであるが、今までと今後の作業の進展を鑑みて進めていきたいと考えている。またその成果を基にして、研究会関係者としては、各自興味のあるものについて論文の製作にも取り組み、資料集の充実を図ればと思っている。

## 近世における祈禱寺院の研究

研究会代表 櫛田 良道

本年度は、前年度に引き続き近世における祈禱寺院関係史料の翻刻・研究を中心に活動した。研究参加者の研究分野における祈禱関係の史料収集と発表、『神田橋護持院日記』の輪読に加え、『筑波山護持院年中行事附臨時雜記』の原本史料解説作業を進めた。同史料は既に「筑波山護持院『年中行事附臨時雜記』——將軍家祈禱の実態——（上・中・下）」（『豊山学報』五〇〇五二号、二〇〇七）として代表者櫛田と指導教授坂本正仁氏の共著により年中行事部を翻刻・発表済だが、附部分に当る「臨時部」については未報告の状態である。本史料の年中行事部分からは護持院が実施した、徳川將軍家に関わる祈禱事例が全て記載されており、その内容を以て、將軍家祈禱の基本的な様相を理解することができる。しかし、恒常的な祈禱は、寺院側の山内行事として形式化されているものの、天変地異や災害、將軍の健康状態に関わる臨時の祈禱については論及の余地を残している。これまでに発表した論考では、近世期における、日鑑や御触などの法制史料に記載された内容の収集と分析により、臨時の祈禱に対する一定の位置付けがなされている。そうした研究状況下において、今回の臨時部の解説内容を加えることは、將軍家祈禱の実態をより

深く論及することが可能と考える。

研究会では、原本コピーを用い各自ページ毎の分担作業とした。しかし、記載されている文字が小さく字数も多いため、解説作業には時間を要し、臨時部全体の四分の一度に留まっている。ここまでの内容は、諸国寺院から護持院を介して將軍家へ進上される文書の雛型が中心で、献上願や色衣願などの案件に関するものである。こうした点から、幕府への願い出について、寺院側と幕府機関の間で交わされた折衝の様子を窺い知ることができる。当初予想していた、天変地異などに関する臨時祈禱の内容とは異なるが、こうした幕府取次の機能については他史料では知り得ない重要な内容である。

また、同時進行として「護持院日記」（護国寺所蔵）の嘉永六年（一八五三）分の解説作業にも着手した。同年はペリー率いるアメリカ海軍が日本へ来航した年であり、幕末の動乱の直接的要因としても知られる。こうした国家的危機において、將軍家の武運長久を担う將軍家祈禱寺ではどのような動きがあったのかは論及されていない。護持院は、幕末を経て廃仏毀釈運動により廃寺へと追いつまれる。同史料の解説によって、この時における同寺を取り巻く社会情勢がどのように影響していったのか、その様相を窺い知ることが期待できる。以上のような考察を進め、近世期における祈禱寺院の在り方について、今後も研究を進めていきたい。



## 中世東国仏教研究会

研究会代表 大八木 隆祥

当研究会は、いまだ十分な研究がなされているとはいえない中世東国の仏教の実態を解明すべく発足したものである。現在は神奈川県立金沢文庫保管称名寺聖教の写本『仙芥集』（一三函——一〇三二）の翻刻を進めている。

『仙芥集』は鎌倉時代の真言僧である定仙（一二三三—一三〇二）が、鎌倉に住しながら多くの人師より様々な法流を受法したその記録である。定仙が受法した者の中には幕府に招聘され畿内有力寺院から下向して来た者や、後世に一法流の祖と仰がれるような人物もおり、その内容も正統で一流のものである。その受法記録である『仙芥集』は、一三世紀後半の鎌倉における真言密教の人的交流や法流授受の実態を窺い知ることのできるまさに第一級の資料と言える。

当研究会では一昨年度に一三函——一の一冊、昨年度は一三函——四・七・八の三冊を翻刻し、解説と解題を付して当該年度の『綜合佛敎研究所年報』誌上に発表した。本年度は過去二年の作業方法を見直し、効率化と正確さを追求した。従来は写本一冊ごとに担当者を決め、担当者が翻刻したものを研究会において出席メンバー全員で検証し討議する形を取っていた。しかし、担当者によって作業

進度や出席率が異なり、結果として担当者が出席できないために研究会が開催できなかったり、開催しても翻刻の量が少なく検証が進められなかったりという事態が往々にしてあった。これを反省し改善するため、本年度は担当制を廃止し、研究会開催当日の出席者全員で翻刻作業を行うことにした。また作業の効率化のため綜佛研究室のプロジェクトを利用し、出席者の内一名をPCへの打ち込み担当とし、その他のメンバーはリアルタイムでスクリーンに映し出される翻刻を見ながら検証・討議する方式とした。この方式は本年度より試験的に導入したものであるが、実際に効率的に作業が進み、本年度は一三函——二・三・五・六・九の五冊の翻刻を完了。一三函——一〇の途中で年度末を迎えた。よって、本号にはその完了分の五冊に解題を付し掲載することができた。

以下、本年度翻刻完了分の概要を記す。

### ①一三函——二

三宝院流の青雨經法・轉法輪法・後七日兩種護摩加句についての口伝を記したものの。識語が無いため伝授に係る状況は不明であるが、本文中に「了一上人」という記述が見られることから、了一上人公然の伝を記したものと考えられる。公然については不詳であるが、血脈類によれば三宝院流の末流である遮那院流と意教流を相承している。

### ②一三函——三

本冊は三宝院流の四度加行・許可作法・愛染王次第につ

れをもつて本年度を終えるが、来年度も継続して翻刻作業を進め、全冊翻刻を目指したい。

いて三寶院流の末流地藏院流を相承する太政法印親玄（一二四九～一三二二）の口伝を記したものである。識語から正応四年（一二九二）六月廿六日に記したものであることがわかる。

③一三函一―五

本冊も親玄の口伝であり、三寶院流の請雨經・太元・守護經・愛染王次第・白表紙受法次第について記している。

この内「白表紙」は、三寶院流の諸尊法集『秘鈔』の異名である。識語によれば正応三年（一二九〇）九月二十二日に受法したものである。

④一三函一―六

三寶院流の三寶院舍利・自行次第・妙抄・大法秘法・如法愛染次第・如法尊勝・請雨經・祖師開眼・馬陰藏三昧地について親玄の口伝を記している。識語によれば正応三年九月二十七日に記したことは確かであるが、それが伝授の日付であるかは不明である。

⑤一三函一―九

三寶院流の大法・修法等・作法儀式について口伝を記したものの。

本文中に「宰相阿闍梨云」「了上人云」「大政法印云」とあることから、一人の阿闍梨の口伝を記したものではなく、定仙が受法した三寶院流各師の伝をテーマごとに並記したものと考えられる。

以上五冊はすべて三寶院流に関する受法記録である。こ

## 『理趣広経』研究会

研究会代表 大塚 恵俊

『理趣広経』研究会は、平成二十三年度大正大学大学院助成金によって発足した『理趣経』研究会を前身とし、続く平成二十四年度に綜合佛教研究所の一研究会として新たに発足することになった。本年度は、助走期間を経て正規の研究会として活動した二年目である。

真言宗所依の読誦經典に位置づけられる理趣経には、略本から広本に至るまで多くの類本が存在し、特に略本に位置づけられる不空訳『般若理趣経』を中心として多くの研究成果が報告されている。また近年では、苦米地等流氏によって略本に相当する新出梵文写本の校訂本が出版され、略本に関する研究はさらなる進展が見込まれる。一方、広本に関する研究成果は、乏しいと言わざるをえない状況にある。広本に位置づけられる『理趣広経』は、略本の内容に種々の密教儀礼を実践するための儀則が付加されており、その全容は未だ明らかになされていない。そこで本研究会は、『理趣広経』を中心に持ち上げて理趣経類本全体の研究発展の一助となることを目標としている。

本研究会の基本方針は、『理趣広経』の校訂テキスト作成とその読解である。残念ながら本経のサンسكريット語原典は未だ発見されていないことから、校訂テキスト作成

の際には、本経のチベット語訳および漢訳を中心に扱わざるをえない状況にあるが、『初会金剛頂経』を始めとする関連文献との比較を通じて、可能な限り原語を部分的に回収しながら作業を進めている。また、これまでは数多く存在するチベット語訳版本の中で、デルゲ版、北京版、チョーネ版、ナルタン版、ラサ版、河口写本（東洋文庫所蔵）の六本を校合させていたが、今年度からトクパレス版、シェルカル版、ブタク版を追加している。

本経のチベット語訳は、前編に相当する「般若分」（*Śrīparamādya-nāma-mahāyānakalparāja*）、後編に相当する「真言分」（*Śrīparamādya-mantrakalpakhaṇḍanāma*）に二分されてチベット大蔵経に収められており、それぞれ翻訳者が異なる。また本経の漢訳には、宋代の法賢により翻訳された『最上根本大楽金剛不空三昧耶大教王経』があるが、明らかな誤訳と思われる部分が随所に確認されることから、その扱いには注意を要する。さらに本経には、*Ānandagarbha* による註釈『略釈』および『広釈』の二種類がチベット大蔵経に収録されており、その中でも詳細な逐語訳である『広釈』（*Śrīparamādya-tīkā*）を参照している。『広釈』は原文を引用して註釈する形式であり、*Ānandagarbha* 著作当時の『理趣広経』原文が回収できることから、校訂テキスト作成の際に有用である。

本年度は「真言分」に入り、その第1章である「金剛薩埵章」の読解を進めたが、一部の先行研究において指摘さ

れているように、プタク版の読みが他版と著しく異なっており、取り扱いには注意を要することを確認している。プタク版の読みに関する問題は、今後の研究会においても取り上げていき、『理趣広経』全体を通じた視点でプタク版をどのように扱うべきかを検討していく所存である。

なお、本年度の『綜合佛教研究所年報』には、本経第六章・第七章のチベット語訳校訂テキストを報告する。

## 仏教文化におけるメディア研究会

研究会代表 森 寛

仏教文化におけるメディア研究会は、正式な共同研究会へと昇格した本年度で活動三年目を迎える。我々の取り組みでは、文化現象としての仏教に着目し、古代インドから現代までの造形美術と、及び近現代の視覚媒体を通じて表現される仏教的イメージの様相について観ていく。この取り組みでは、学問分野の諸領域を横断し、様々な問題と関連し合うかたちで注目され意味と形象という二つの観点から、仏教文化が生み出してきた多種多様なイメージを考察する。意味をめぐる論考では、仏教的イメージテクストから、国家・時代・階級・宗教・思想・価値観等のイデオロギーを読み解き、仏陀と仏陀信仰を基盤とする仏教的表象の展開と変遷について探究する。また、形象をめぐる議論では、イメージをめぐる人間の営みに焦点を当て、人間の身体とメディア表現を通して、観念と物質との双方を往来しながら、イメージが視覚的に形象化される社会的過程、人間の身体へ様々な作用をもたらすメディアとイメージの性質と機能、あるいは、作る人間ならびに視る人間と関係づけられるイメージの問題について解明する。それより、仏教が、諸現象をどのように意味づけて、いかに秩序立てた世界を構築しようとしたのか、更には、そのような仏教

的世界へ身体的存在である人間をいかに位置づけてきたのかという問題を、人類によるイメージの生産と受容、伝達という視点から考えるのが、研究の目指す方向性となる。

紀元前五世紀頃の古代インドに実在したとされる釈迦が創唱した仏教は、当初、インド北部から、次第に教線を拡大し、世界各地の広域へと伝播する。その原動力となつたのは、情報を媒介して伝達するメディアの存在である。初期伝道の段階においては、仏教の根本原理であるダルマを口伝によって伝えていたが、教主の言行が亡失するのを防ぐために、次第に文字言語による教理の保存と継承を試みる。他方、一般民衆の間で仏教信仰が隆盛すると、文字が読めない人々を含めた幅広い社会階層への教化に対応するため、視覚や聴覚などの身体感覚に作用する媒体を用いた布教活動が展開する。仏教は、これらの伝達手段を活用することで、インド周辺から東アジア全域まで伝播し、西欧諸国にも認知される事となる。こうして世界各地で受容されてきた釈迦の教えは、時代や地域ごとに、政治、経済、階級、信仰、芸術、習慣、思想、価値観などの諸観念と融合し、新たな解釈が加えられることで多様な仏教的イメージを生み出す。

こうしたメディアが生み出す仏教イメージについて考察する本研究会は、引き続き、総合仏教研究所に所属する研究員を中心とした定例会と、毎月一回の月例会を水曜日に開催し、参加研究者各自が、それぞれに分担する研究テ

マを深化させる作業に取り組んだ。

森 覚 仏教絵本に見る釈尊とイエスの混交

藤近恵市 古代インドにおける仏教文化の捉え方

高橋洋子 高橋五山と仏教紙芝居―勢至丸様を中心に―

大澤絢子 『親鸞伝絵』制作における覚如の意図をめぐって―『伝絵』の絵相比較より

猪股清郎 眼に見える「形」から眼に見えない“dhāma”

へ―内なる「自然じねん」から「大日即身」への構造―

金 永晃 慶州仏国寺のその思想的背景と寺院建築様式

嶋田毅寛 ボロブドゥール―消失する暗号かマンダラか

清水浩子 須弥山の宇宙観が伝えるもの

今年は、「大正大学総合佛教研究所叢書 刊行企画 執筆要綱」を作成し、体裁や引用方法といった原稿作成規約、図表の用い方、共通テーマへの意識といった点を、著作権法や研究倫理規定に照らし合わせながら決定した。また、執筆締め切りや出版社との交渉についても話し合い、具体的な進行計画を確認したところである。これを踏まえて来年度は、原稿を執筆すると共に、出版社との交渉を進め、出版化の具体的な道筋をつけたい。

## 仏教学の形成と展開に関する基礎的調査 研究会

研究会代表 三浦 周

本研究会は本年度（平成二十七年年度）、発足二年めを迎えた。以下、本研究会の方向性を述べる。

明治期における「近代学問」の移入以来、わが国にも多くの研究領域が誕生した。仏教学もその中のひとつである。仏教伝来以来つづいてきた伝統教学も近代教育制度・機関の中で徐々に変遷を遂げ、「近代仏教学」として形づくられた。この近代仏教学ができてからおよそ一〇〇年以上の時間が経過している。

ただ「近代」はあらゆる事象を領域化し専門分化させる。その結果として、仏教学という一領域の中でさえ、その専攻は細分化している。それ故に仏教学者間でさえ、専門用語の遣り取りが困難な状況に陥っている。専門分化の弊害であろう。

この問題は仏教学に限らない。故に領域間の横断が研究上での課題となり、それを目指すのが学際的研究だといえる。一方で同一領域の俯瞰視も必要となる。具体的には研究史の構築である。

仏教学における研究史的記述は、研究者の伝記や評伝、あるいは記念論文集などの序文、業績一覧、または全集の月報などに散見される。しかし、研究史としてまとめられ

たものは少ない。さらに、これらの大半が「記憶」であり、教育制度やカリキュラム・教材を踏まえた検証可能なデータ、つまり「記録」として提出されたものは皆無といつてよい。

研究史の構築には一定の需要が見込まれるにも関わらず、研究が行われてこなかったのには理由がある。偏に作業が煩瑣であることに因る。

本研究会は、その煩瑣な作業を行い、仏教学の研究史構築を目的としている。

だが、仏教学全般を対象とすると作業量が膨大になるので、当面の目標を梵語学（梵文学）研究史に限定する。

これは明治期以降の仏教における外国語（サンスクリット語・パーリ語・チベット語）の学習が新たな近代仏教学の形成に大きく寄与したと考えることに因る。

それでもまだ手に余ることは十分に予想される。そのため梵語学研究史の主な対象を大正大学としている。なぜなら大正大学は天台宗大学・豊山大学・智山専門学校・宗教大学とそれぞれ梵語学を教授していた教育機関が合併された大学であり、かつ世界で唯一、複数宗派を母体として設立された大学であることに因る。

また、『大正新脩大藏經』および『漢訳対照梵和大辞典』の刊行が近代仏教史においてエポックな事象であることは疑問を差し挟む余地がないだろう。その刊行に中心的に携わった渡邊海旭・荻原雲来はともに大正大学の梵語学史に

大きな足跡を残している。否、むしろその歴史は二人から始まったといつてよい。こうして、華々しくスタートをきった大正大学における梵語学史がどのような変遷を辿ったのか。

一教育機関における一研究領域の変遷をスタートから現在に至るまで網羅する試み、これは仏教学において例をみない。

本年度は基礎資料の発掘および整理と同時にフィールドワーク（当事者への聞き取り調査）も開始した。来年度もこれを継続していく予定である。また、収集・整理したデータは小冊子にまとめて再来年度以降に刊行する予定である。

最後に、本研究会では随時共同研究者を募集している。詳しくは綜合佛教研究所、あるいは代表者 (haiyaron@gmail.com) まじり一報を乞う。